

『ゆっくりズムのまち桐生』の着実な実現について（改訂継続）

『ゆっくりズムのまち桐生』の活動について、以下の理由により桐生市自らの研究と、市民への定着と実践を求める呼びかけをお願いします。

「ゆっくりズムのまち」は、桐生市ホームページでは「スローモビリティとスローライフのまち」と定義されています。ゆっくりズムのまちづくりを提唱した故宝田恭之群馬大学教授は、長年にわたり持続可能な人間社会を実現するために必要なバイオマスの活用等を研究テーマとして取り組んでこられた方であることは、多くの方が周知のことです。先生のレポートによると、その発案の元は、「成長の限界・人類の選択」にあるとされています。この本は、1970 年代に発行された、ローマクラブによる「人類の危機レポート 成長の限界」にたどり着きますが、このレポートは、地球資源を使いつくし、汚染物質をまき散らす人間の社会活動に対して、人類が地球での生活を持続できるようにするための警鐘を鳴らしたもので、その 20 年後に「成長の限界・限界を超えて」が発行され、相変わらず地球の破壊を進める人類への警鐘が鳴らされました。そして、その 10 年後に待ったなしの現実を突きつけたのが、先生が取り上げた「成長の限界・人類の選択」です。現在は、そのさらに 20 年後ですが、人類は相変わらず地球環境の破壊を続けながら経済優先の活動を繰り広げており、本書に書かれた危機的状況が刻々と悪化していることが解ります。現在の日本人の生活は、地球 2.7 個分の負荷を与えるものであり、宝田先生がゆっくりズムを提言した意味は、価値観の転換により、エネルギーや資源の消費を抑えた地球 1 個分の生活ができ、且つ幸福感を失わない持続可能な地域を創ることを目指したものと理解できます。

つまり、『ゆっくりズムのまち桐生』づくりは、桐生市ができるだけ取り組む課題ではなく、将来にわたり持続可能な生き残り都市を目指すのであれば、取り組み必須、実現必達の課題であり、それは桐生市民一人ひとりが取り組まないと実現ができないテーマであるということなのです。

現在、桐生市の環境先進都市将来構想推進協議会に設置されたワーキンググループでの協議が始まっていますが、桐生市としても世界的な食糧、エネルギー危機、災害の発生などに対してレジリエントな桐生市を構築するために『ゆっくりズムのまち』についての研究と実現を目指すことを求めます。

桐生市からの回答

「ゆっくりズムのまち桐生」につきましては、令和 5 年度に公募で決定したロゴマークを、市及び民間の事業で広く活用していただいているとともに、生き生き市役所出前講座や各種イベント、広報紙等により、市民への定着と実践の呼び掛けを行っているほか、桐生市環境先進都市将来構想推進協議会ワーキンググループと連携し、「市花サルビアを中心に花や緑を楽しむことができるまちづくり」として、サルビアの植栽に取り組むなど、普及啓発に努めています。

また、「ゆっくりズムのまち桐生」をテーマにした「SDG s 未来都市」の取り組みとし

ましては、令和 6 年 1 月に「桐生市 SDG s 官民共創プラットフォーム」を創設し、市の課題解決と魅力向上に向けた官民共創事業を展開すべく、民間事業者等からの提案を広く募集する「公民連携民間提案制度」を開始したほか、SDG s に取り組む企業・団体を市のパートナーとして登録し、知見の共有や連携により SDG s の推進を加速化する「桐生市 SDG s パートナー」制度を、令和 6 年度中の開始を目指して準備を進めるなど、「ゆっくりズムのまちづくり」の環境整備に努めています。

このほか、令和 5 年 12 月に策定した「桐生市交通ビジョン」にも「ゆっくりズム」の理念を取り入れ、その象徴である MAYU に代表されるグリーンスローモビリティなどの活用を図りながら、持続可能な交通まちづくりに取り組んでいます。

いずれにいたしましても、持続可能なまちづくりに向け、引き続き「ゆっくりズム」の研究を深めつつ、様々な機会を捉えて市民へ価値観の転換や行動変容を呼び掛けながら、皆様とともに「ゆっくりズムのまちづくり」を進めてまいります。

〔回答担当〕 市民生活部 SDG s 推進課ゆっくりズムのまち桐生推進担当